
東方銀流星

暗黒ミカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方銀流星

【Nコード】

N6287W

【作者名】

暗黒ミカン

【あらすじ】

合理性に埋めつくされた現代社会。

そんな世界の中で忘れられ、色あせて、消える定めが存在たちが美しく、鮮やかに、輝きながら存在し続ける理想郷「幻想郷」

そんな世界に一人、現代に生きる少年が流れ着いた。

その少年は星を見て「先」を理解する。星を見て光を操る。

これから語られるのは、そんな少年の物語。

少年、流れ着いて（前書き）

世界の皆様こんにちは。自分は暗黒ミカンというものです。

今回はこのサイトの他の小説に影響されて自分も東方小説を書いてみました。

楽しんでいただければ幸いです。

それでは、お楽しみ下さい。

少年、流れ着いて

四面楚歌。

そんな言葉がぴったり似合う状況だ。

僕は今、囲まれていた。

まだ昼だというのに木漏れ日すらも届かない森の奥。

食料にと森に茸を取りに来たら、すっかり油断してこのザマだ。

後ろには、黒い体躯の目が8つもある一本足の獣が。口には尖った無数の牙がズラリ。

右には岩のような体で鳥のような翼を持つどう考えても生物の理に適ってない巨体。

左にはおびただしい数の脚をもつ毛むくじゃらの蜘蛛のような何か。そして目の前には黒い服を着た少女が宙を漂っている。

見た目だけは普通の女の子なのに、無風で（何故か）なびく金髪と無邪気な殺気を放つ紅い瞳は『私は人間じゃないぞ』と十二分に語っている。

もつとも、そんなこと少しも知りたくは無いが。

僕を囲むこの人外どもは僕を帰してくれるところか、今すぐ僕を取って食おうと

虎視眈々と隙を覗っている。

「ねえねえ、お兄さん」

目の前の少女が僕に語りかけながらじりじりと包囲を詰める。

正直、すごく怖い。今すぐにでも発狂できればどんなに楽だろうか。でも僕は今、悔しくもまともな神経を保っているらしい。

そつ、まともなのだ。だが・・・いやだからこそ僕は生き残らなけ

ればならない。

幸い僕は数日前までの何の力も持たないただの高校生だった存在ではない。

僕には今、こいつらに対抗できるだけの力がある。

怯える心を蹴っ飛ばし、無理やりにも勇気を奮い立たせる。

さあ………来い！

「あなたは……食べてもいい人間！？」

「………星よ！光よ！！」

事は数日前に遡る。

どこだろう、ここは・・・

まずは状況整理。僕は確か、学校から帰ってきて少しだらして、勉強して、ゲームをした。

その後確か、眠くなってきた、軽く眠ろうと思いベットにダイブしたはずだ。

そう。そんな何気ない日常。だったはずなのに・・・

何故僕は、こんなよくわからない森の中で寝そべっているのだろうか。

陽気なポカポカとした木漏れ日、さわさわと揺れる木の枝、そよ風、チュンチュン啼く鳥たち。

・・・本当にどういうことだろうか。夢？いや、にしては意識がはつきりしている。

そう言えば、眠る前に金髪の綺麗な女性を見た気がするが・・・なんだかぼんやりして思い出せない。

「・・・とりあえず、水でも飲むか。」

なんだか頭がぼーっとする。こういう時はリフレッシュに限る。

僕は体を起こして近くの川へと歩いていった。

「で、ここどこよ？」

思わずぽつりと言葉が漏れる。川の水は案外美味しく、頭はすぐに
まともな思考をするようになった。でも、ここがどこで、何故僕はこんな所にいるかは全くわ
からない。

仕方が無いので辺りを歩いて周ることにした。

歩くこと数十分。いまだ人一人として見つからない。このままだと少しまずいかも……

お、家？家がある！森のなかにぽつんと一軒。赤い屋根で煙突のついた家だ。

早速入ってみよう！

森の中の一軒の家。ドアをノックする。

「すみませーん！どなたかいらっしゃいませんかー？」

「いるぜー！少し待ってろ！今そっちに行くから！」

少し間が空いて元気な声が響く。ドタドタと足音が近づき、勢い良くドアが開いた。

「おまたせ！……で、どちらさん？」

姿を現したのは、黒を基調とした服を着た少女だった。

元氣そうな子だ。金髪だから外人さんかと思ったが今時珍しい話でもない。

つと、用件用件。

「あのですね、実は僕道に迷ってしまいました。ここはどんな土地なんでしょうか？」

失礼の無いように用件の言った。しかし返ってきたのは意外な言葉だった。

「おいおい、用件を言う時はまず名前を言うのが礼儀ってモンだろ？」

あ、それもそうか。じゃ、自己紹介しないと。

「ああ、すみません。僕の名前は・・・」

ぐぎゅううううるる・・・

「・・・え？」

あ、僕って案外お腹すいてたんだ。

しかし・・・やっちゃったなあ・・・

これが、僕がこの土地、幻想郷に訪れて初めて出会った人物であり、僕の親友の一人となる人物との出会いだったりする。

少年、流れ着いて（後書き）

・・・と、言うわけで第一話でした。

いかがだったでしょうか？やはり自分ではなんとも言えませんがそこそこの出来にはなっただと思います。

しかし、主人公の名前も出ないとはこれや如何に。

と言う訳で次回は「少年、幻想を知る」（仮）です。
お楽しみに！

少年、樂園を知る（前書き）

お久しぶりです。暗黒ミカンです。

約二ヶ月ぶりに銀流星更新できました。

遅くなってしまういけません・・・（苦笑

後、日曜まではPCが使えないので、感想等に返信ができませんがご了承ください

それでは、楽しんでいてください！

少年、樂園を知る

美味しそうなシチューだ。

テーブルの真ん中にはホカホカと湯気を昇らせるチチューが小さな鍋に入っている。

いたって普通の、強いて言えば茸の多いホワイトシチューだ。

僕がいるのは、先程見つけた一軒屋のリビング。

イスが二つだけのこじんまりとしたテーブルだ。

もつとも、周りには用途の分からない『モノ』が

沢山置いてあつてかなり散らかっているが。

トカゲの燻製らしきモノ、変な色の液体が入った小瓶、怪しげな本と羊皮紙。

・・・不気味ですらある。あまり女の子らしくない。むしろ魔女か何かだ。

何なんだろうこの子・・・

何故僕がこうしてテーブルに座ってるのか。簡単なことだ。

話は、ほんの少し前に遡る。

ぐぎゅゅゅゅうううううるるる・・・

彼女の目の前で大きく腹の虫を鳴らしてしまった。その事実を理解すると、顔が一気に熱くなった。

うわ、やっちゃったなあ・・・

その様子に呆気にとられてた彼女は、暫くぼかんとしていたが、やがてクスクスを笑い出した。

「おいおい、お腹すいてるのか？」

からかうような目で僕を見てくる。しどろもどろになりながらも何とか答えた。

「え、ええ、まあ、あ、あはは……」

そう訊いた彼女はニヤリと笑い、先程とは違った元気そうな笑みを見せた。

「まあ、ちょうど今お昼ごろだし。……なあ、ところでアンタ、急いでる？」

と、突然彼女はそう訊いてきた。向けられる視線には、何かを期待するかのような色が映る。

僕は今現在、（多分）見知らぬ土地でアテも何一つ無い。そして、そんなに急ぐことは。……まあ、無いと思う。

家のこととか気になるが、大して急がなくてもいい……気がする。だから、答えた。

「はい。多分大丈夫ですよ。」

すると彼女はにっこりと笑い、こう言った。

「よし、じゃあ私ン家で昼メシ食ってけよ。その様子からしてアンタ『外来人』みたいだし、話はメシ食いながらにしようぜ？」

おお、なんと有難い！当然、断る理由は何も無い。親切な人に逢えて良かったなあ。

こうして僕は誘われるがままに彼女の家に招かれ、昼ご飯までご馳走になることとなった。

が、もしここで僕が彼女の申し出を断っていたら、今僕はどうしているのだろうか。

アレに食われて骸むくろと化していたか。

はたまた、今まで通りの日常に戻れたのか。だが、もうその未来は無い。

僕自身が決めた。それで全てだ。

最も、こんな風に自分を考えるのは、もった先のことだが。

とにかく、今の僕の頭は情けないことにご飯のことで一杯であった。

そして時間は今に至る。

「さて、お待ちせ。」

彼女が戻ってきた。料理の準備をしてきたらしい。

椅子に腰掛ながらシチューの取り皿を渡してくれた。

それを受け取ると、彼女が話を始める。

「さて、まずは自己紹介からだな。私の名前は『霧雨理沙』きりさめまりさだぜ。よろしく。」

・・・変った名前だなあ。それに服装もなんか不思議だ。黒を基調としたブラウスと白いエプロン付きのスカート。顔の方はやや幼さが残る童顔

とも言える。金の瞳がはつちりとした大きな目にこれまた金髪のふんわりとしたショートヘア。別に変なところは無いのだが、どこか異国めいた違和感を覚える。

どこから見ても外人なのに日本語ペラペラだからだろうか。さて、僕も名乗らないとか。

「僕は『天野^{あまの}洸^{こう}一^{いち}』って言います。ところで・・・」

「まあ待てって。知りたいことなら話してやるからよ。」

僕が話を切り出そうとすると彼女に遮られる。まあ話してくれるならいいけど。

「まず、洸一。お前が流れ着いた所だが・・・名前は『幻想郷』時代の流れの中で失われたありとあらゆる、全ての幻想が流れ着く場所だ。」

・・・？なんだ、それ・・・？

いまいち話を理解出来ない僕を無視して、魔理沙は話を続ける。

「『外来人』洸一、ようこそ、幻想郷へ！」

それから僕は、魔理沙から幻想郷についてもっと詳しい話を聞いた。

曰く、この世界には大昔から『妖怪』や『神』といった御伽噺の中だけの存在がいたと言う事。

曰く、人間と上手くバランスを取っていた彼らも時代が進み、文明が発展すると共にだんだんと消えていったと言う事。

曰く、ある時それを嘆いた妖怪『八雲紫』やくもゆかりがそついった者達を消さないために現実と幻想を隔てる壁『博麗大結界』はくれいだいけっかいを作り、かくまった事。（具体的にどういう物なのかは魔理沙から説明されてもよく分からなかった）

そしていつしか結界に囲われたその土地は誰ともなく幻想郷と呼ばれるようになって

神や妖怪たちが騒がしくも平和に暮らしてるという事らしかった。

そして、運良く（悪く？）幻想郷に入り込んだ人を『外来人』と呼ぶそうだ。

・・・さて、ここまで聞いて普通の人は一体どう思うだろうか。

答えは大体これ一つだろう。

『何言ってるんだ、こいつ』

そう、僕も最初はこう思っていた。だってそうだろう？もし貴方がある日道に迷って

どこか馴染みの無いところに来てしまつて、近くにいた少女に道を尋ねて「ここは異世界です」なんて言われて一体誰が納得できるのか。

むしろ相手に妄想癖があるのでは・・・

という考えに至るには当たり前前の事だろう。だから僕も信じなかったのだが、彼女はそこで普通では有り得ないものを見せ付けてくれた。

まずその前に、この幻想郷における一般的な揉め事解決の方法を説明しよう。

先程も話したが幻想郷には妖怪や神といったものが多く存在する。

そして彼らは、人間視点からすれば十二分に異能と言える力を持つものも多くいる。

怪力を誇る鬼、空を舞い風を起こす天狗や鳥の妖怪、人を喰らう吸

血鬼や狼男、

作物の実りを左右し豊穰をもたらす神様。

その他色々、挙げ始めればきりが無いもの達・・・

もし、そういったものの達が何かのきっかけに争いを始めたら、どうなるだろうか。

無論、ただでは済まない。争いが起これば物が壊れたりもするだろう。

力の強い者なら、地形を変えることも十分可能だ。

そして、幻想郷はもととそこまで広い土地ではないらしい。

もし争いが起こればあつという間に焦土と化すことになるだろう。

そうなれば、折角作った楽園も無意味なものになったしまうだろう。そこでこの幻想郷には、揉め事解決のための一つのルールが存在する。

その名は『弹幕ごっこ』又は『スペルカード対決』と呼ばれる。

これは人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールだ。

具体的にどういう物かと言うと、まず始めにあらかじめ技の名前と命名

しておいた名前の意味を体现した技をいくつか考えておき、

それぞれの技名を契約書形式で記した契約書を任意の枚数所持しておくことになる。この契約書を「スペルカード」と呼ぶ。

このカードを使うと、カードの持ち主の持つ、もしくは大気中の霊力、

妖力、魔力等を使って記された技の名前を元にカードが

使用者の意思を汲み取り、通称『弹幕』と呼ばれるエネルギー弾を放出する。

(ごく一部、格闘攻撃が混じったりすることもあるそうだが・・・)

この『弹幕』は、見た目こそ攻撃だが、中身はかなりスカスカの威力皆無な物で、当たっても身体的なダメージはないらしい。

もちろん、物が壊れたりもしない。

勝敗の決め方は実にシンプル。

相手の弹幕を避けつつ、自分の弹幕を相手に命中させるかというも

のだ。

一回の勝負ごとに使えるカードや被弾^{ライフ}可能回数を決めて弾幕を掻い潜りながら隙を狙って自分の攻撃^{ショット}を当てていく。

それが『弾幕ごっこ』だ。

こういうルールを決めることで、『戦い』を『スポーツ』のようなものと捉え、

さらに勝者が敗者に追い討ちを掛けるのを禁止することで安全にトラブルを解決しようと言っことらしい。

さて、此処まで長々と『弾幕ごっこ』のルールを説明してきた。その理由は、魔理沙が僕に幻想郷の存在を信じさせるためであった。そして魔理沙は僕にそれを見せてくれた。他ならぬ『弾幕』をである。

「……その弾幕を？」

「そつだ！さすがにコレを見せればお前も納得するはずだぜ！」

彼女の話半分半信半疑で聞きながらシチューに舌鼓を打っていた僕に、彼女はそう言った。

「……えー、ホントかよそれ。」

中々信じようとしないう僕に彼女は業を煮やしたらしく、少々いらついている。

ちなみに、かなり美味しいシチューだった。

「とりあえずこのシチュー食ったら表に出るぞ！私がお前に勝った
ら、

お前はこの幻想郷を信じろ！もし私が負けたら……お前を魔法の
実験台に

してやる！」

無茶苦茶である。

ちなみに彼女は毎日魔法使いを目指して日々修行中だそつだ。

種族としてでない後天的な魔法使いになることが夢らしいが

……魔法使いに後先あるのだろうか。

まあ、詳しいことは知らないが。

毎日色々な魔法薬を生産しているらしい。……ってちょっと、

それは案外危ないのでは！？もちろん僕が！！

彼女曰く、毎回どんな薬品が出来るかは作らないとわからないそつ
だし、

毒物ができることもよくあることらしい。つまりだ。

勝負に負ける↓薬飲まされる↓死ぬ

・・・という事も十分ありうる！

オマケに、飲まされる薬品を少し見せてもらったが、どれも明らかにアブナイ色をしてたりボコボコ音をたてたりと、どう見ても安全そうに

見えないものばかりなのである。

これは死ぬる！明らかに死ぬるッ！！絶対死ぬ！！！！

だが、僕の頭にある考えが閃いた。そうか、こうすれば助かる！

「待つて魔理沙、僕はそのスペルカードを持ってないよ！」

これこそが、僕の秘策！そもそも僕はスペルカードを持って無い。だから弾幕ごっこはできない！ふふふふ、どうだこの完璧な作戦h

「ああ、それは大丈夫だ。『スペルブレイク』って言って相手の弾幕を回避するだけでも

当たらずに避け切れれば勝てるんだぜ！」

なん・・・だと・・・！？

「さあ、そうと決まればさっそく始めるぜ！」

彼女が僕の腕をつかんで家の外に連れて行く。こうなってはしかたがない

弾幕を避けて避けて避けまくって魔理沙をぎゃふんと言わせる

他無いだろう。よし・・・やってやる、やってやるぞ！！

こうして、よく分からないうちに勢いで決意を決めた僕であった。アホである。

ちなみに、勝敗が決まった時のペナルティが無茶苦茶だったと
気づいたのは、弾幕ごっこをした後だった。僕はどこまでもアホで
ある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6287w/>

東方銀流星

2011年12月7日15時49分発行